

日本刀鑑定用語：どうコミュニケーションしてきたか

● 福 田 博 同

抄録：『古事記』以来、名剣が記されるが、鑑定のための特殊用語は鎌倉時代から古文書も残されている。現在でも、それらの特殊用語を用いて刀剣鑑定のために独特なコミュニケーションを行っている。本稿はそれらの専門用語を、デジタル原典を主として分析し、『日本美術シソーラス：工芸編』作成の基礎を論じたものである。

キーワード：日本刀、刀剣鑑定、鑑賞用語、デジタルアーカイブ、コミュニケーション

1 はじめに

本稿は『日本美術シソーラス』^{1(全文)}の工芸編作成のため必要な刀剣鑑賞に関する知識を得ることを目的とする。具体的には、言葉の成り立ちや意味するもの、あるいは流派の違いなど、典拠付きデジタルデータとして共有することを目的とする。〔文化庁〕の【国指定文化財等データベース】^{2(全文)}（以下、「文化財DB」と略称）によると、日本工芸の国宝・重要文化財2,568件のうち、刀剣は190件ほどある。作品解説文も一般大衆が理解できない特殊用語の羅列である。しかし、一旦理解するとそれらの用語を含んだ解説文により、刀の流派、時代、刀匠の特定の刀が浮かび上がる。それらの教育には「誌上鑑定」^{3(全文)}もあり、他の美術品解説と大きく異なる。鑑定の古文書の変遷から記録された用語により、刀剣鑑定のコミュニケーションの成立が若干分かる。本稿では芸術情報学的手法により、これらを論ずる。また、デジタル処理を容易にするため、必要な区切り記号を以下のように使用する。《作品》、〔作者や団体〕、【事項、用語】、『典拠』、{地域}、〈時代〉。デジタル典拠には、【e-國寶】^{4(全文)}、【国立国会図書館デジタルコレクション】（略称『国会デジコレ』）^{5(全文)}など多数ある。『国会デジコレ』は著作権法の関係上、「書影公開」、「送信参加館」限定公開、「国会図書館内」の3種サービスがある。「送信参加館」は、近所の図書館が参加していれば閲覧が可能である。これら公開の場合「書影☆」、限定公開の場合、注番号の後に「書影□」、「国会図書館内」は「書影△」と付した。脚注は、全文、書影、書誌の区別を記載し読者の便を図った。また、典拠は2017年1月31日に全件を再調査したので日付は記載しない。それ以降、デジタル典拠が不明になる場合もあるので、その場合Webアーカイブである〔Internet Archive〕の【WayBach Machine】^{6(全文)}を利用されたい。

2 刀剣鑑定の古文書

〔正倉院〕の『國家珍寶帳』（〈天平勝宝〉8歳（756））に【刀剣目録】も含まれる。〔宮内庁〕の「正倉院宝物検索」（「正倉院検索」と略称する）で書影を見ることができる^{7(書影☆)}。そこには《陽寶劍》、《陰寶劍》、《金銀莊唐大刀》、《金銀鈿莊唐大刀 | きんぎんでんそうからたち》、や《銀莊高麗様大刀》、《横刀 | たち》、《黒作懸佩刀》など、一部形状を含めた目録が記載されている（【正倉院検索】コマ13-18）。また、刀匠の祖神〔天目一箇命 | あめのまひとつのみこと〕の《天叢雲劍 | あめのむらくものつぎ》以来、名刀は文書にも残された（典拠：〈712年〉編纂の『古事記』（国会デジコレ）^{8(書影☆)}コマ26）。著名な話では、『増鏡』（後鳥羽上皇「新島守」の節）に「剣

などを御覧じ知ることさへ、いかで習はせ給ひたるにか、道のものにもややたち勝りて、かしこくおはしませば、御前にてよきあしきなど定めさせ給ふ」とある（和田英松編『増鏡：校註』（『国会デジコレ』943303、コマ20）^{9書影☆} 全文は〔荒山慶一〕氏の『増補本系増鏡・全二十卷』^{10全文}にある）。これらは断片的な記述で、【刀剣鑑定書】としての体裁を保つ現存最古のものは鎌倉時代末正和五年（1316）起算の『銘尽』である（解説は後述）。〔石井昌国〕氏は『日本刀銘鑑』（ここでは『銘鑑』と略す）^{11書誌}において、刀剣鑑定のため、以下の書籍を典拠に記載している（五十音順）。ここでは現時点でデジタルアーカイブとして閲覧できる書籍を太字で表わし、時代順に簡解する。

『愛剣』、『今村押形』、『永禄銘尽』、『往昔抄』、『大分郷土刀鍛冶銘鑑』、『大坂新刀年譜』、『刀の研究』、『観智院銘尽』、『鑑刀随録』、『木屋流目利秘伝書』、『慶長銘鑑』、『元亀元年目利書』、『光山押形』、『弘治銘尽』、『校正古刀銘鑑』、『校正古刀銘鑑追録』、『光徳刀絵図』、『古今鍛冶備考』、『古今鍛冶名集録』、『古今鍛冶銘早見出』、『古今剣工銘尽』、『古今銘尽』、『古今類字銘尽』、『古刀銘集録』、『古刀銘尽大全』、『古刀刀中心形』、『御物東博銘刀押形』、『薩摩の刀と鐔』、『主要刀剣展等図録』、『春霞刀苑』、『正銘秘伝』、『新刀押象集』、『新刊秘伝書』、『新々刀大鑑』、『新刀鍛冶綱領』、『新刀古刀大鑑』、『新刀弁疑』、『新刀銘集録』、『新刀銘尽後集』、『新刀銘尽』、『新版日本刀講座』、『長享銘尽』、『築地刀剣会押形』、『土屋押形』、『鉄舟』、『刀苑』、『刀華会講話』、『刀剣会誌』、『刀剣趣味』、『刀剣春秋』、『刀剣史料』（雑誌）、『刀剣と歴史』（雑誌）、『刀剣美術』、『刀剣銘字典』、『刀剣銘大集』、『刀工総覧』、『日本刀講座』、『日本刀工辞典』、『日本刀辞典』、『日本刀全集』、『日本刀大鑑』、『日本刀通観』、『日本刀の近代的研究』、『日本古刀史』、『能阿弥銘尽』、『濃州刀銘鑑』、『長谷川忠右衛門家伝書』、『刃文と銘字』、『秘伝銘録聞書』、『本阿弥代付鍛冶系図』、『本阿弥光瑳押形』、『本朝鍛冶考』、『埋忠押形集』、『銘尽秘伝書』、『目利書国々国入』、『もくろく』、『山田浅右衛門刀剣押形』、『陸軍受命刀匠名簿』、『和朝古今鍛冶の次第』、『蔵手刀』。

以下、太字の書籍や『銘鑑』にない書籍を含めデジタルアーカイブされている資料を年代順に簡解する。

2.1 鎌倉時代

- ① 『銘尽』^{12書影☆} 重要文化財。正和五年（1316）起算、応永三十年十二月（1424）の写本。刀剣の茎（なかご、中心とも）の形状、銘、鑢目（やすりめ）を図示・鑑定上の注記、系図を記載。表紙に『刀剣鑑定之書：京都東寺子院観智院取伝：応永三十年の古写』とあり、「本書正和五年著作 観智院法印権僧正住宝所脱 津田葛根蔵」とある。「正和銘尽」、観智院所伝故に「観智院銘尽」ともいう。1316年活躍以前の刀匠を古代から記述している。

2.2 室町時代

- ① 『長享銘尽』^{13書影☆} 〈長享三年〉（1489）起算。永享二年（1430）豊前国下毛郡山田多志田村永住坊筆の『金剛峯楼一切瑜伽祇経』の紙背に記され、〔安田文庫〕原本〔帝国図書館〕の臨模本（昭和15年（1940）1月、麴池三吉が書写）。刀身、茎、銘、鑢目、彫物を図示・注記、系図を示す。『銘尽』よりは詳細。
- ② 『往昔抄』^{14書影□} 〈永正十一年〉（1514）、美濃の〔齋藤利安〕（元肅公）の資料（茎を図示、銘を書写）を子の〔齋藤利匡〕が抄録し、〔平直滋〕に書写を許可。同十六年（1519）書写本を元和頃（1615-1623）転写したもの¹⁵。
- ③ 『光徳刀絵図集成』^{16書影□} 〔本阿弥光徳〕が文禄三年（1595）に作成し、〔毛利輝元〕に献上した『太閤御物刀絵図』が素。本史料は、後の〔埋忠寿斎〕本や文禄四年の「大友本」、慶長

五年（1600）の「転写本」を照合し、〔帝室図書館〕（現国立国会図書館）の『大阪御腰帳』を加えた【刀絵図】である。

2.3 江戸時代

- ① 『本朝古今銘録』^{17書影☆}〈慶長元年〉（1596）起算。光悦流の嵯峨本¹⁸に近い版本であるが、出版年は慶長頃か。
- ② 『解紛記』^{19書影☆}〈元和六年〉（1620）長谷川忠右衛門直次より奈良市右衛門宛の奥書のある写本。慶長までの刀匠約100工を国別、系統別に特徴を記す。
- ③ 『刀剣古伝書』（別名『長谷川忠右衛門家伝書』か）^{20書影☆}〈元和六年〉（1620）。長谷川忠右衛門尉藤原直次より奈良市右衛門宛記した巻物（写本）。古刀上作59工69点の押形集（刀身、刃文、銘、鑢目、無銘の場合等は該当刀匠名）。
- ④ 『空中斎秘伝書』^{21書影☆}〔本阿弥光悦〕の孫〔本阿弥光甫〕が〈承応二年〉（1653）奥書した秘伝書。勢州で借用した安政四年（1858）の写本を〔羽皐隠史〕が1913年に活字化し『諸家秘説鑑刀集成』として崇山房から発行したもの。本阿弥家に伝わる刀剣鑑定秘伝を示した貴重史料。
- ⑤ 『水心子正秀全集』^{22書影☆}幕末の刀匠〔水心子正秀〕の著。内容：『刀剣弁疑』〈文化十三年〉（1816）、『刀剣實用論』〈文化九年〉（1812）序、『劍工秘傳志』〈文政四年〉（1821）口伝。『鍛錬玉函』（発行年不明）。川口陟氏が〈大正〉に活字化したもの。特に『劍工秘傳志』は鉄、焼刃等の製法秘伝が記されている。
- ⑥ 『古今鍛冶備考見出』^{23書影□}『古今鍛冶備考』は現在デジタルアーカイブになく、その【袖珍本】で文政年間（1818-30）の版本が利用できる。国会デジコレ本は天保六年（1836）に増補した版。
- ⑦ 『雲智明集』（別名：『掌中古刀銘鑑』『鑑定秘事録』）^{24書誌}弘化二年（1846）刊。〔佐藤幸彦〕氏「掌中古刀銘鑑（雲智明集）の正体」^{25書誌}p.196によると、〔本阿弥長根〕の『校正古刀銘鑑』を流用し、図解や肌、沸匂、彫物を補い鑑定会の虎の巻にしたもの。
- ⑧ 『土屋押形』^{26書影☆}幕臣〔土屋温直〕が嘉永元年（1848）迄集めた茎や切先の押形集、945工を収集。
- ⑨ 『本朝鍛冶考』^{27書影☆}18巻（1-6分冊）。〔鎌田魚妙〕が嘉永四年（1851）に撰した鍛冶名工。4分冊目（午・未編）以降に押形がある。

2.4 近現代

- ① 『刀剣鑑定秘訣 古刀編』^{28書影☆}〔本阿弥弥三郎〕が明治38年（1905）に鑑定の心得、鑑定用語、流派等を解説した書。
- ② 『刀剣と歴史』（雑誌^{29書影□}）羽澤文庫、1号（明治43（1910））-
- ③ 『鉄と鋼：製造法及性質』^{30書影☆}〔俵国一〕氏の著。図解タタラ製鉄法コマ67、鋤押法コマ83。
- ④ 『光山押形』^{31書影☆}〔本阿弥光山〕が収集した2,727本の古刀の茎（中心）の押形（筆写）。1917年刊行。
- ⑤ 『新刀鍛冶綱領 上』^{32書影□}〔神津伯〕氏の著、1921年刊行。刀剣の偽作、鍛錬法、慶長以降新刀の作風、著名刀工等を解説した書。
- ⑥ 『刀工総覧』^{33書影☆}〔本阿弥光遜〕、〔室津鯨太郎〕が編集し1925年刊行。『校正古今鍛冶銘早見出』、『古今鍛冶備考見出』を底本として、『刀剣研究』等の銘鑑を参考に、約300工を「いろは順」に記載。例えば〔信國〕（廿五人）○山城了戒久信子二字建武二相州貞宗門又来光重男彌五郎と稱し京信濃小路、五条坊門に住すともいふ ○同二代二字應永元同廿三定國同人

一本平安城々とも打つと云（後略）」のように記す。

- ⑦ 『刀剣鑑定講話』^{34書影☆}〔本阿弥光遜〕が1925年に刊行。内容：日本刀の沿革、総説、鑑定心得、五箇伝、新刀特伝及同刀工一覧竝古刀、新刀、新々刀の區別、各刀工の掟と特徴。
- ⑧ 『今村押形』^{35書影□}「正宗抹殺論」で著名な〔今村長賀〕の押形集。1926年刊行。第一巻130工。第二巻135工、第三巻80工。例えば第二巻コマ28に「銘：「源左衛門丞信國」彫：素剣に蓮台、裏銘：「永享三年六月日」彫：素剣に蓮台の押形には、□□造り上个ハ壹尺九寸□ 乱刃 □表先より七寸斗□□□□□ 地ニ疵あり□他地ニ程キ□あり 小肉心」のような崩し字の書き込みがある。
- ⑨ 『刀剣銘字典』^{36書影□}〔川口陟〕氏等編集の銘鑑、1928年刊行。刀工の「いろは順」銘鑑。
- ⑩ 『刀剣図考、武器考証』第1巻^{37書影☆}〔栗原信充〕、〔伊勢貞丈〕両氏の図解刀剣鑑定書。1931年刊行。【Google Books】で公開。【Gmail】に登録し、Google Booksで無料購読し「マイライブラリー」に登録する。
- ⑪ 『刃文と銘字：新刀集』^{38書影☆}1933年、〔藤城義雄〕氏の新刀に関する全国の代表刀工219工の押形と説明。
- ⑫ 『日本刀の近代的研究』（ここでは『小泉1933』と略す）^{39書影☆}〔小泉久雄〕氏の著した刀剣の制作過程をも含めた解説、1933年刊行。尚、Google Booksでは逆順に撮影され、頁送りは逆。
- ⑬ 『刀剣銘大集』^{40書影□}〔清水澄〕氏の撰した刀剣銘鑑、1934年刊行。
- ⑭ 『新刀押象集』^{41書影□}〔加島勲〕氏、〔内田疎天〕氏の著。1935年刊行。本物のみの押形。新刀の〔埋忠明寿〕以下、287工、補遺13工。
- ⑮ 『日本刀通観』^{42書影□}〔内田疎天〕氏の著した刀剣鑑定書、1935年刊行。内容：日本刀史の十四断面、刀工と其系図及受領考、剣工故地略解、日本刀其物に就て、大和鍛冶考、山城鍛冶考、等々。
- ⑯ 『鑑刀随録』^{43書影□}〔小泉久雄〕氏著1937年刊行。内容：「玉鋼の特質」、「作刀法」、「刀剣漫語」、「押形」。
- ⑰ 『日本刀工辞典』古刀篇^{44書影☆}、新刀篇^{45書影☆}〔藤代義雄〕氏の著した刀工辞典、1938年刊行。
- ⑱ 『日本刀大鑑』^{46書影☆}〔本阿弥光遜〕氏の日本刀鑑定用語、流派の解説（ここでは『大鑑』と略す）。
- ⑲ 『御物東博銘刀押形』^{47書影□}〔佐藤貫一〕氏、〔沼田鎌次〕氏の編集、1958年刊行。218工を収集。内容：刀剣種類、評価、銘、裏銘、法量、形状（造り、鍛、刃文、帽子、彫物）の説明有、切先、刃文、茎の押形有。
- ⑳ 『刀剣史料』（雑誌^{48書影□}）南人社、1959-1964。
- ㉑ 『日本古刀史』^{49書影□}〔本間順治〕氏の刀剣研究書、1963年刊行。上代から室町時代までの刀剣流派と主な刀匠の鑑定。
- ㉒ 『刀華会講話』^{50書影□}〔本間順治〕氏の古刀編名作流派の解説、1964-65年刊行。第一集：山城国古刀編。内容：「山城国来派」、「山城国信国派」、「山城国長谷部派」、「山城国粟田口派」。第二集：相模国古刀編。第三集：大和国古刀編。第四集：備前国古刀編。各流派の押形、銘を例示し特徴を記す。
- ㉓ 『新々刀大鑑』^{51書影□}〔飯村嘉章〕氏の著、1966年刊行。
- ㉔ 『新版日本刀講座』雄山閣^{52書影□}1966-70年。全10巻（第1巻、概説編、第2巻、古刀鑑定編、上、第3巻、古刀鑑定編、中、第4巻、古刀鑑定編、下、第5巻、新刀鑑定編、第6巻、新々

刀鑑定編、第7巻、小道具鑑定編、上、第8巻、小道具鑑定編、下、第9巻、外装編、第10巻、研究総括編)。

デジタル書影の良さの第一は老眼でも拡大可能で、拡大本より見やすいことである。そして圧倒的な検索の便である。デジタルアーカイブは公開が促進される。これら以外に刀剣基本書として、『能阿弥銘尽』^{53書誌}や『木屋流日利秘伝書』、『元亀元年日利書』^{54書誌}などは現時点ではデジタル化されていないが、前述のデジタル資料を活用して、典拠付き刀剣鑑賞用語の変遷を模索する。

3 刀剣流派と當同然

慶長(1596-1614)を境とした古刀・新刀区分は〔神田白龍子〕が享保六年(1721)に序した『新刀銘鑑』^{55書誌}から始まる。定説を記した常石英明編『日本刀研究と鑑定』古刀編(以下『常石古刀編』と略す)^{56書誌}、新刀篇(以下『常石新刀編』と略す)^{57書誌}があるが、本稿では紙面の都合上、古刀編の流派と主な刀匠を示す。また、子や兄弟、弟子が師匠作を【摸作】して相伝する。場合によっては【代作】するので、すでに1846年の『雲智明集』^{24書誌}では鑑定会用に「當同然」として同流の鑑定に役立てている⁵⁸。これは流派区分に役立ち『小泉1933』^{39書影☆}でも p.67-70(コマ679-678)にあり、以下に現代語訳にして記す。

- ①「當」：銘が的中、②「當同然」：親子、兄弟、師弟に入札した時、③「国入能候」：同国内の縁のない鍛冶に入札した時、④「通能候」：街道の縁のない鍛冶に入札した時、⑤「時代違」：新刀、古刀の時代を誤って入札した時、⑥「イヤ」：上記の全部違う時、⑦「イヤ縁アリ」：国違えだが流派系統の関係がある、⑧「イヤ筋能候」：違っているが師筋は関連がある、⑨「互ニイヤ」：例：「栗田口物と京物」

これら「當」、「當同然」、「イヤ縁アリ」は流派区分に当たる。

3.1 直刀期

『常石古刀編』p.4によると直刀時代は神代から平安時代前期までで、流派が明らかになるのは平安時代中期を待つ。

- ① 神代・上古代時代は「大和鍛冶部時代 | 刀剣舶来時代 | 刀匠渡来時代 | 大和、韓部鍛冶同居時代」である。代表的刀匠や刀剣は以下のとおり。
 - (ア) 《十握劔 | とつかのつるぎ》(『日本書紀』神代上巻：国会デジコレ)^{59書影☆}
 - (イ) 《天叢雲劔 | あめのむらくものつるぎ》 = 《草薙の劔 | くさなぎのつるぎ》(『日本書紀』神代上巻：国会デジコレ)^{60書影☆}
 - (ウ) 《蛇韓劔 | おろちからさびのつるぎ》黒坂勝美編『訓読日本書紀. 上巻』岩波書店、1943、コマ38国会デジコレ)^{61書影☆}。この一説だと、この十握劔は韓国製
 - (エ) [天目一箇神 | あめのまひとつのかみ] (『日本書紀』神代下巻)^{62書影☆}
 - (オ) [太刀佩部 | たちはきべ] と大和鍛冶部(やまとのかぬちべ)の〔河上〕(黒坂勝美編『訓読日本書紀. 中巻』コマ38国会デジコレ)^{63書影☆}
 - (カ) 《句礼の真劔》(『訓読日本書紀. 下巻』国会デジコレ)^{64書影☆}
- ② 奈良時代：〔天国 | あまくに〕『銘尽』(1316年)(国会デジコレ：コマ14)^{12書影☆}には「帝尺之劔、村雲御劔作」、「大宝年中三年(703)歟」とある。『長享銘尽』(1489)(国会デジコレ2539344コマ10)^{13書影☆}には「大和國宇多郡の者、大宝年中ヨリ平家重代《小鳥》」とある(旧〔伊勢貞丈〕家蔵《小鳥丸》(松平定信編『集古十種：兵器・刀劔. 兵器 刀劔一』国会デジコレ)^{65書影☆})の作者と記されるが妥当ではない^{66書誌}。
- ③ 平安時代中期まで：〈大同頃〉(806-09)には{伯耆国}〔安綱〕(確実な在銘刀の始まり。『銘

尽』(1316年)国会デジコレ：コマ15)^{12書影☆})があり、〔真守〕〔守綱〕へ続く。〈永延頃〉(987-88)には〔山城國三條〕〔宗近〕や、〔奥州〕の〔舞草鍛冶〕がいる。

3.2 古刀期

弯刀(わんとう、湾刀とも書く)の始まり。〔山城〕、〔大和〕、〔備前〕、〔相州〕、〔美濃〕と隆起した五地域の作風を【五箇伝】という。【五箇伝】の用語は、弘化二年(1846)の『雲智明集』には出現せず、大正十四年(1925)、本阿弥光遜の『刀劍鑑定講話』^{34書影☆}時代には定着している。ここでは紙面の都合上、【五箇伝】並びに、『雲智明集』に示された「當同前」とされる流派を記す。また、流派系譜は〔本阿弥光遜〕の『日本刀大鑑』^{46書影☆}(略称『大鑑』)に詳しいので、その系譜に従った。

3.2.1 菊御作

〔後鳥羽上皇〕の【番鍛冶】(『銘尽』^{12書影☆})。番鍛冶12ヶ月、24名、隠岐番鍛冶6名が知られる。

3.2.2 山城伝の流派

系譜の流れは諸説あるが、その一つを記載した。記号は次の通りに示した。親子師弟は「―」、同名次代は「ゝ」、複数の子弟は「|」、流派の師筋は小文字。

- ① 〔三条派〕(〔三条宗近〕―〔吉家〕|〔近村〕|〔有国〕―〔五条兼永〕―ゝ―〔五条国永])
- ② 〔綾小路派〕(〔綾小路定利〕『長享銘尽』^{マ19}、〔定吉〕、〔定則])
- ③ 〔粟田口派〕(〔大和国〕具足師〔国頼〕―〔国家〕―〔国友〕|〔久国〕|〔国安〕|〔国清〕|〔有国〕|〔国綱〕。国友―〔則国〕―〔国吉〕|〔国光〕―〔吉光〕(『銘尽』^{マ18,25}、『長享銘尽』^{マ18})
- ④ 〔来派〕(国吉(粟田口也)―〔国行〕―〔国俊〕―(〔来国俊])―〔国光〕|〔国次〕(『銘尽』^{マ26,31}、『長享銘尽』^{マ20})
- ⑤ 〔了戒派〕(来国俊―〔了戒〕―〔了久信〕(『銘尽』^{マ23}、『長享銘尽』^{マ19})
- ⑥ 〔信国派〕(了戒(―了久信または―了国久)|〔貞宗〕―〔初代信国〕―〔二代信国〕『長享銘尽』^{マ19}―〔応永信国〕―〔豊前信国])：来国俊―了戒―了国久―信国の系譜だが、鎌倉貞宗にも学ぶとある。
- ⑦ 〔長谷部派〕(了戒|貞宗―〔長谷部国重〕『長享銘尽』^{マ20}―〔国信])
- ⑧ 〔平安城派〕(舞草派―〔平安城光長〕、〔長吉])
- ⑨ 〔達磨派〕(〔重光〕、〔正光])
- ⑩ 〔三條吉則系〕

3.2.3 大和伝

- ① 〔千手院派〕(〔行信〕、〔重弘〕『長享銘尽』^{マ21}、〔力王〕『長享銘尽』^{マ22})
- ② 〔当麻派〕(〔国行〕、〔友清])
- ③ 〔手搔派〕(〔包永〕、〔包清])
- ④ 〔尻懸派〕(〔則長])
- ⑤ 〔保昌派〕(〔貞宗〕、〔貞吉])
- ⑥ 〔金房派〕(〔正重〕、〔正次])

3.2.4 他の近畿地方

- ① 〔摂津国〕：来国俊―〔中島来派〕(〔来国長])、② 〔河内国〕：三条宗近―〔三条有成派〕、③ 〔和泉国〕：〔加賀四郎派〕、④ 〔伊賀国〕：〔宗近派〕、〔国綱派〕、⑤ 〔伊勢国〕：〔村正派〕、〔雲林派〕、⑥ 〔紀伊国〕：〔入鹿派〕、〔簀戸派〕、⑦ 〔近江国〕：相州貞宗―〔高木貞宗〕―〔甘呂俊長〕、〔中堂来派〕

3.2.5 美濃伝 {岐阜県}

- ① {志津派} : 相州正宗一 {志津三郎兼氏} ② {金重派} ③ {善定派} ④ {寿命派} ⑤ {赤坂千手院派} ⑥ {関} {兼定派} ⑦ {関} {兼元(孫六)派} ⑧ {関} {兼房派} ⑨ {関} {氏房派} ⑩ {関} {兼道派}
- ⑪ {関} {大道派} ⑫ {関} {兼常派} ⑬ {関} {蜂屋派}

3.2.6 他の {中部地方}

- ① {尾張国} {国次}、{梅茂} 等 | ② {三河国} {薬王寺派}、{国宗派}、{助宗派} | ③ {遠江国} {友安派}、{高天原派} | ④ {駿河国} {義助}、{助宗}、{広助}

3.2.7 {相州伝}

- ① {粟田口国綱}
- ② {新藤五国光派}、{新藤五国広}、{大進房祐慶}、{藤三郎行光}
- ③ {藤源次助真派}、{助常}、{国広}
- ④ {備前三郎国宗}
- ⑤ 新藤五国光一 {正宗}
- ⑥ {正宗十哲} 諸説ある。{貞宗} {広光} {越中国則重} {江義弘} {長谷部国重} {左安吉} {長義} {兼光} {来国次}
- ⑦ 正宗一 {貞宗} — {広光}、{秋広} {綱広}、{広正} 等

3.2.8 他の {関東地方}

{武蔵国} {下原鍛冶}

3.2.9 {東北地方}

- ① {陸奥国} {宝寿派}、② {出羽国} {月山派}

3.2.10 {北陸地方}

- ① {若狭国} {冬広}、② {越前国} 来派一 {千代鶴派}、{浅古派}、③ {加賀国} {藤島派}、{橋詰派} ④ {越中国} 相州正宗一 {郷義広}、{為継}、相州正宗一 {則重派}、{宇多派} ⑤ {越後国} 信国源五郎一 {山村派}、{桃川派}

3.2.11 {山陰地方}

- ① {丹波国} {粟田口派}、{来国定}、{畠国俊} ② {但馬国} {法成寺国光派} ③ {因幡国} {景長派}
- ④ {伯耆国} {安綱派}、{大原真守}、{真景}、{元重}、{広賀派} ⑤ {出雲国} {吉井派}、{道永派}、{忠貞派} ⑥ {岩見国} {直綱派}、{貞綱}

3.2.12 {備前伝}

- ① {古備前派} : {友成派}、{正恒派}、{古備前恒次}、{古備前包平}、{末古備前}
- ② {福岡一文字派} : {則宗派}、{宗吉派}、{助行派}、{助房派}、{信房派}、
- ③ {吉岡一文字派} : {助吉}、{助光}、{助重}
- ④ {正中一文字派} : {正中一文字吉氏}、{吉守}、{吉利}
- ⑤ {長船派} : {光忠}、{景秀}、{長光}、{景光}、{近景}
- ⑥ {相伝備前派} : 相州正宗一 {兼光}、{義光}、{倫光}、{政光}
- ⑦ {長義派} : 相州正宗一 {長義}、{長綱}、{長守}
- ⑧ {元重派} : {元重}、{元真}、{元久}
- ⑨ {鵜飼派} : {雲生}、{雲次}、{雲重}
- ⑩ {畠田派} : {守家}、{守重}、{守長}、{家助}

- ⑪ [大宮派]：[国盛]、[盛重]、[盛景]、[師景]
- ⑫ [吉井派]：[吉則]、[清則]、[永則]、[景則]
- ⑬ [応永備前派]：[盛光]、[康光]、[師光]、[祐光]
- ⑭ [備前派]：[祐定]、[勝光]、[忠光]、[宗光]、[則光]、[法光]、[春光]、[治光]

3.2.13 {備中}

- ① [古青江派]：[守次]、[貞次]、[恒次]、[康次]、② [中青江派]：[貞次]、[次吉]、[次直]、[次久]
- ③ [末青江派]：[長次]、[助次]、[宗次] ④ [片山一文字派]：[則房]、[則常] ⑤ [古水田派]：[国重]

3.2.14 {備後}

- ① [三原派]：[正家]、[正広]、[中三原派]、[末三原派] ② [法華一乗派]：[辰房重光]

3.2.15 {周防} {長門}

- ① {周防} [二王派]：[二王清綱] ② [長門左文字派]：[左文字安吉]、[顕国]

3.2.16 {四国地方}

- ③ {阿波国} [海部派] ④ {土佐国} [土佐吉光派] ⑤ {伊予国} [国吉派]

3.2.17 {九州地方}

- ① {筑前国} [左文字派]：[左文字良西]、[入西]、[西蓮]、[実阿]、[吉貞]、相州正宗—[安吉]
- ② {筑前国} [金剛兵衛派]：[金剛兵衛盛高]
- ③ {筑後国} [三池派]：[三池元真] | [大石左]
- ④ {豊前国} [神息]、[長円] | [信国派]：[信国吉定]
- ⑤ {豊後国} [定秀]、[行平]、[正恒] | [豊後了戒派]：[了戒能定] | [高田派]、[友行派] | [長盛派]、[行忠派]、[豊後來派]：[豊後国宗]
- ⑥ {肥前国} [平戸左派]：[平戸左盛広]、[大村光世]
- ⑦ {肥後国} [延寿派]：[古延寿]、[末延寿] | [同田貫派]
- ⑧ {日向国} [実吉派]：[実吉]、[実昌]
- ⑨ {薩摩国} [波平派]：[古波平]、[末波平]

4 鑑定用語の変遷

ここでは主として1316年起算の『銘尽』^{12書影☆}、1596年起算の『本朝古今銘尽』(略称『本朝銘尽』)^{16書影☆}、1653年奥書の[本阿弥光甫]『空中斎秘伝書』^{書影☆}、1812年発行の[水心子正秀]『劍工秘傳志』^{22書影☆}、1846年発行の[尾関永富]撰『掌中古刀銘鑿』(略称：『雲智明集』)^{24書誌}、1905年発行の[本阿弥弥三郎]著『刀劍鑑定秘訣 古刀編』(略称『弥三郎鑑定』)^{28書影☆}を比較する。用語の図解は1933年発行の『小泉1933』^{39書影☆}のコマ数を示したので参照されたい。また、1942年発行の『大鑑』^{46書影☆}、1998年発行の[小笠原信夫]著『日本刀の鑑定基礎知識』等で補う。

4.1 刀劍の種類 (図解は『小泉1933』^{39書影☆}p.10-4)

- ① 【劍】、劍：両刃 (例：《十握劍》、《村雲劍》(「銘尽」コマ14)、《草薙劍》、蛇韓鋤劍、【真鋤 | まさび】、【飾劍 | かざりだち】(【古事類苑画像検索システム】^{67書影☆})、『小泉1933』p.8)
- ② 【大刀】：二尺 (60cm) 以上片刃 (唐大刀、唐様大刀、高麗大刀、高麗様大刀 (『小泉1933』コマ740)、黒造横刀 (くろづくりたち) (『小泉1933』コマ741)、太刀 (毛抜形太刀、衛府の太刀、小太刀)

- ③ 【刀】：二尺（60cm）以上の片刃（打刀、腰刀、佩刀、片薙）
- ④ 【脇指】（脇差 | わきざし）（一尺～二尺30-60cm）、大脇差、小脇差、)
- ⑤ 【小太刀】（一尺～二尺30-60cm）：【太刀銘】に切ったもの。
- ⑥ 【短刀】（杖刀（『小泉1933』 p.5コマ743））
- ⑦ 【刀子】（とうす）（『小泉1933』 p.9コマ739）
- ⑧ 【鉾】（『小泉1933』 p.5）
- ⑨ 【長刀】：（薙刀 | なぎなた）

4.2 刀身の部位名（以下、図解『小泉1933』³⁹書影☆p.16-17）

- ① 【鋒】（きっさき）：刀身の尖った先端
- ② 【ふくら】：切先の曲線
- ③ 帽子（【銚子】、冒）：切先の部分の焼刃
- ④ 【横手】：切先と地刃の境界をなす線
- ⑤ 【小鑄】（こしのぎ）：鑄地の切先に接する部分
- ⑥ 【三つ角】：横手、小鑄、鑄の三つの線の交差点
- ⑦ 【鑄地】（磨地）：鑄筋と棟との間の平坦な部分
- ⑧ 【地】：鑄筋と刃との間の焼の入らない部分
- ⑨ 【鑄】：地と鑄地との境界線
- ⑩ 【刃】（焼刃）：斬るため焼を入れて固くした部分
- ⑪ 【釧元】（はばきもと）：刀身の釧に近い部分
- ⑫ 【焼出し】：刃文の起点において次第に細く直刃風になれる部分
- ⑬ 【中心】（茎、なかご、こみ）：刀身の下端にして柄の中に入る部分
- ⑭ 【刃区】（はまち）：中心と刃との境目
- ⑮ 【棟区】（むねまち）：棟と刃との境目
- ⑯ 【目釘穴】：目釘を挿すために中心に穿った穴
- ⑰ 【中心鑿】（なかごやすり）：中心を仕上げるためにできた、鑿目
- ⑱ 【中心先】（中心尻）：中心の下端
- ⑲ 【重ね】：刀身の厚み
- ⑳ 【菴】（いおり）：棟の山形
- ㉑ 【腰】：刀身の釧（はばき）に近い部分
- ㉒ 【物打】：切先より凡そ、三寸（9cm）のところ。ここで物を打ち、斬る。
- ㉓ 【銘】：中心の表面に彫りある刀工の官名、姓名等
- ㉔ 【裏銘】：中心の裏面に彫る年月日等
- ㉕ 【所持銘】：中心に所持者の名を「刀主何某」、「何某所持」の如く彫りたるもの
- ㉖ 【長銘】：中心に例えば〔信國源式部丞〕の如く受領名のごときものを添記したもの
- ㉗ 【額銘】：天正、慶長頃、刀の使用上の関係から【中心】下からを短縮。銘を残して埋め込む。【折返銘】もある。
- ㉘ 【極銘】：鑑定家系〔本阿弥〕家が【無銘】を鑑定した銘。

4.3 【地金】（地鉄 | じがね）（図解『小泉1933』³⁹書影☆p.18-20）

- ① 【銚】（ずく）：応永頃（1394-1427）まで、刀工が砂鉄から脱炭精錬し作る、刀工説がある（『劔工秘傳志』コマ 88、『小泉1933』コマ737）。しかし、山陰地方では古代から鑪（たたら）製鉄（『小泉1933』コマ736）。

- ② 【玉鋼】(鋼 | たまはがね) : 砂鉄から製鉄業者が作る。鑪 (たたら) 製鉄法で作成。
- ③ 【出羽鋼】(いづははがね) : 鑪製鉄で出来た鋼塊を溜池に入れ急冷
- ④ 【千草鋼】(ちぐさはがね) : 鑪製鉄で出来た鋼塊を自然冷却 (以上、水心子正秀『劔工秘傳志』^{22書影☆} コマ86-97、図解『小泉1933』 p.11))
- ⑤ 【南蛮鉄】 : 異国から輸入した鉄。元禄六年 (1693) 没〔信国吉包〕の「以南蛮鉄造之」の刀がある。〔水心子正秀〕が南蛮鉄、露西亜鉄、阿蘭陀鉄の解説あり (水心子正秀『劔工秘傳志』^{22書影☆})。
- ⑥ 【包丁鉄】 (図解『鉄と鋼』コマ89、および、図解『小泉1933』コマ725、724)
- ⑦ 【焼刃土】 : 刃文作成用に塗る『小泉1933』 p.22
- ⑧ 【木炭末】 : 水分吸収に効果があるか、【地沸】に白い顆粒状のものができる原因か、不明。
- ⑨ 【砥石末】 (焼刃土) : 亀裂を防ぐため使う
- ⑩ 【心金】 (心鉄 | しんがね) : 粘り気ある炭素分の少ない地金。これを固い【皮金】で包む。(以下図解『小泉1933』 p.18-22))
- ⑪ 【皮金】 : 【心金】を包む固い地金。【マクリ】、【甲伏】等の造刀法では【刃金】になる。
- ⑫ 【刃金】 : 刃に使用する最も固い地金。
- ⑬ 【棟金】 (むねがね) : 棟に使用する地金。

4.4 【鍛】 刀身を鍛える方法と出来た地肌 (以下、図解『小泉1933』^{39書影☆} p.20-22)

- ① 【四方鍛】 (四法詰)
- ② 【本三枚鍛】 (真の鍛)
- ③ 【マクリ】 (甲伏) : 皮金が心金をU字状に巻き鍛える。
- ④ 【無垢鍛】 (丸鍛)
- ⑤ 【匂】 (におい) (以下、図解『小泉1933』^{38書影☆} コマ721) 鉄の光る粒 (Martensite) が霞のごとく見える。
- ⑥ 【沸】 (にえ) : マルテンサイトが肉眼で見える (星々の如し)。刃以外、地にもある場合【地沸】という。
- ⑦ 【板目肌】 (以下、図解『小泉1933』^{39書影☆} p.18-20) : 板目の肌
- ⑧ 【柁目肌】 (まさめはだ) : 柁目 (縦筋文様) の肌
- ⑨ 【無地肌】
- ⑩ 【綾杉肌】 : 杉の杓目が交互に現れる、〔三品宗次〕は刀身の表裏が同模様。
- ⑪ 【梨子肌】 : 梨の実を切ったような【小板目】【小木目】の刀身肌

4.5 【造込】 恰好 (図解『小泉1933』^{39書影☆} p.30-31)

- ① 【鑄造】 (本造) : 刀剣の基準作。刀身を表裏にして中側に厚み (頂点を鑄という) がある造り
- ② 【平造】 : 【鑄】のない平らな刀身
- ③ 【菖蒲造】 : 菖蒲の茎のような刀身
- ④ 【鶴首造】 (冠落し)
- ⑤ 【切刃造】 (片切刃)
- ⑥ 【諸刃造】 (両刃造)
- ⑦ 【おそらく造】
- ⑧ 【華表反】 (とりいぞり | 京反、陰ノ造) : 反りの頂点が中央近く。
- ⑨ 【腰反】 (こしぞり | 陽ノ造、備前反) : 反りの頂点が鉦元近く。
- ⑩ 【フンバリが強い】 : 刀身の鉦元に近い部分が身幅、厚み、ともにあり、しっかりしている。

4.6 【鋒】(切先) (図解『小泉1933』³⁹書影☆p.32-33)

大鋒、中鋒、小鋒に分かれ、【フクラ】の曲線で丸みあるのが「フクラつく」、少ないのが「フクラかれる」、直線に近いのが【鯨切先】(かますきさき)という。

4.7 【棟】(むね) (図解『小泉1933』³⁹書影☆p.33)

【真の棟】(三つ棟)、【行の棟】(菴棟)、【草の棟】(丸棟)に分けられる。

4.8 【樋】(図解『小泉1933』³⁹書影☆p.33-34)

樋(俗に血流し)：重量減と調子の調整のため彫る溝。祈願のため俱利迦羅、梵字同様、爪を加える場合もある。

【棒樋】【二筋樋】【腰樋】【護摩箸】【長刀樋】【真ノ長刀樋】等がある。

4.9 【刃文】(図解『小泉1933』³⁹書影☆p.35-38)

刃に映る文様を言う。刃以外にも映る。『大鑑』⁴⁶書影☆では種類も大幅に増えている。

- ① 【直刃】(すぐは)：凸凹ない直線状の刃文(『小泉1933』コマ712)。
【細直刃勾本位】【細直刃沸本位】【細直刃勾本位】(以上図解『大鑑』コマ35)。
【中直刃沸本位】【広直刃勾本位】【広直刃沸本位】、【小湾勾本位】【小湾沸本位】、【大湾勾本位】【大湾沸本位】【小五の目勾本位】(以上図解『大鑑』コマ36)。
【小五の目沸本位】【大五の目勾本位】【大五の目沸本位】【肩落五の目勾本位】【五の目丁字勾本位】(以上図解『大鑑』コマ37)。
【小丁字乱勾本位】【小丁字乱沸本位】【大丁字乱勾本位】【逆丁字乱勾本位】【直刃丁字乱勾本位】【乱勾本位】(以上図解『大鑑』コマ38)。
【展開きたる乱勾本位】【小乱勾本位】【小乱沸本位】【大乱勾本位】【大乱沸本位】【逆乱勾本位】(以上図解『大鑑』コマ39)。
【逆乱沸本位】【馬の乱勾沸崩】【皆焼】【五の目尖り勾本位】【箱乱勾本位】【鋸乱勾本位】【矢筈乱勾本位】【五の目乱勾本位】(以上図解『大鑑』コマ40)。
【五の目乱沸本位】【濤瀾沸本位】【湾乱勾本位】【湾乱沸本位】【簾乱】【富士乱】【菊水乱】【吉野乱】(以上図解『大鑑』コマ41)。
【竜田乱】(図解『大鑑』コマ42)。
- ② 【湾刃】(弯刃 | のたれは)：曲線のある刃(『小泉1933』p.35)
- ③ 【丁字刃】：備前物に多い、【丁字の花】形の刃文。【重華丁字】、【逆丁字】、【大房丁字】などがある。(以下『小泉1933』p.35-36)
- ④ 【五ノ目】(互の目 | ごのめ、ぐのめ)：互い違い曲線。【大五ノ目】、【小五ノ目】、不規則な【五ノ目乱】、丁字と組み合わせた【五ノ目丁字】、細かい【数珠刃】などがある。
- ⑤ 【乱刃】：乱れの曲線が不規則なものの総称。【大乱レ】、【小乱レ】、乱れながら湾れは【湾乱レ】、矢筈様は【矢筈乱レ】などがある。
- ⑥ 【三本杉】〔関孫六〕が考案し〔関派〕が主として使用。杉の大小三本組が反復する。
- ⑦ 【濤瀾乱】(とうらんみだれ)〔津田助廣〕が考案した大波が寄せるような刃文。
- ⑧ 【足】：【刃文】とは別に縦長の文様。『銘尽』には「足深く入る」の表現がある。
- ⑨ 【葉】(よう)：刃の縁から離れ刃の中にあるもの。【沸】が【地】についたものを【地沸】
- ⑩ 【金筋】：【葉】の一種で、【沸】がつながって一本の線のように光るもの
- ⑪ 【稲妻】：【葉】の一種で、【沸】がつながって太く長く光るもの
- ⑫ 【砂流し】(すながし)：既に『銘尽』には表現があるが、『刀剣鑑定秘訣』巻1コマ19には「刃の内外に砂を箒にて掃きたるが如く、沸たるものを云ふ。此の種のは相州伝に多し」とある。
- ⑬ 【地映り】：【地】に刃文の影が薄白く映るようなもの。〔古備前〕に多い。(『小泉1933』³⁹書影☆p.39-40)

- ⑭ 【白気】：〔来派〕や〔関派〕にある、【地映り】と似たぼーっとした白い部分。(『小泉1933』^マ708)
- ⑮ 【湯走り】(以下、解説文『小泉1933』p.40、図解『大鑑』^{46マ}31))
- ⑯ 【飛焼】：地の中の離れ島のごとき焼
- ⑰ 【二重刃】：刃に平行した筋、
- ⑱ 【打ノケ】：刃に平行しところどころほつれている部分
- ⑲ 【地景】(ちけい)：地に沸や匂が凝集して現れている
- ⑳ 【地斑】(じふ)：地に板目杳目が細かく詰まっている部分
- ㉑ 【肌割】(『大鑑』^{46マ}31)
- ㉒ 【匂足】(『大鑑』^マ31)
- ㉓ 【匂崩れ】(『大鑑』^マ31)

4.10 【銚子】(解説文『小泉1933』^{39書影☆}p.37-38)

銚子の図は『大鑑』^{46書影☆}コマ41-42を参照されたい。

- ① 【小丸】(【小丸匂本位】【小丸沸本位】【小丸下り匂本位】【小丸下り沸本位】)
- ② 【大丸】(【大丸匂本位】【大丸沸本位】)
- ③ 【焼詰】(【焼詰匂本位】【焼詰沸本位】)
- ④ 【横手上刃細し】
- ⑤ 【一文字返り】(以上『大鑑』コマ41)
- ⑥ 【乱に乱込】(【乱に乱込匂本位】、【乱に乱込沸本位】)
- ⑦ 【地藏】(【地藏匂本位】、【地藏沸本位】)
- ⑧ 【一枚】(【一枚匂本位】、【一枚沸本位】)
- ⑨ 【乱込小丸風に返る】(【乱込小丸風に返る匂本位】【乱込小丸風に返る沸本位】)
- ⑩ その他：【沸崩】、【火焰】、【掃掛】、【丁字乱に乱込】、【返り寄る】、【返り深】、【返り堅く止まる】(以上『大鑑』コマ42)

4.11 【中心】(図解『小泉1933』^{39書影☆}p.38)

- ① 【生中心】(うぶなかご)：制作時のままの茎
- ② 【磨上】(すりあげ)：(図解『大鑑』^{46書影☆}コマ25)
- ③ 【雉子股】(きじもも)(図解『大鑑』^マ24)
- ④ 【振袖】(図解『大鑑』^マ24)
- ⑤ 【尻張】(図解『大鑑』^マ24)
- ⑥ 【タナゴ腹】
- ⑦ 【栗尻】(以下、図解『大鑑』^マ25)
- ⑧ 【剣形】(けんぎょう)

4.12 【鑢】(やすり)：(『銘尽』コマ5-12、『雲智明集』、図解『小泉1933』^{39書影☆}p.38-39)

- ① 【筋違鑢】(大筋違鑢、小筋違鑢)『銘尽』(図解『大鑑』^{46書影☆}コマ25)
- ② 【切鑢】(大切鑢、小切鑢：『銘尽』)(図解『大鑑』^マ25)
- ③ 【勝手下り】『雲智明集』【勝手上り】『雲智明集』
- ④ 【突掛鑢】(つっかけやすり)
- ⑤ 【流れ鑢】『銘尽』
- ⑥ 【檜垣鑢】『銘尽』、(図解『大鑑』^マ25)
- ⑦ 【鷹羽鑢】『雲智明集』、(図解『大鑑』^マ25)

- ⑧ 【乱鑢】『雲智明集』
- ⑨ 【槌目】(図解『大鑑』⁷⁷p.25)
- ⑩ 【せんすき】(図解『大鑑』⁷⁷p.25)
- ⑪ 【化粧鑢】(図解『大鑑』⁷⁷p.25)

4.13 【彫物】(図解『小泉1933』³⁹書影☆ p.40-41)

彫物については伊藤満氏『刀剣に見られる梵字彫物の研究：刀工と修験道の関係』(略称『伊藤彫物』⁶⁸書誌)に詳しい。

- ① 【尊像】・【梵字】(【種子】)(例：〔役行者〕〔不動明王〕(例：《滝不動》や「不動明王種子：カーン hām)〔大日如来〕〔阿弥陀如来〕〔薬師如来〕〔観世音菩薩〕〔文殊菩薩〕〔愛染明王〕〔毘沙門天〕〔摩利支天〕等(『伊藤彫物』 p.164-)
- ② 【神祇】(名号：例「伊勢天照大神」/「信国源式部丞」)(『伊藤彫物』 p.164-)
- ③ 【俱利伽羅】：劍卷龍(上り龍、下り龍等がある)で不動明王を表現(『伊藤彫物』 p.191)
- ④ 【劍】(『伊藤彫物』p.176)、【素劍に爪】(『伊藤彫物』p.178)、【三鈷柄劍】(『伊藤彫物』p.185)
- ⑤ 【護摩箸】：【修験道】における杖の象徴か(『伊藤彫物』 p.200-)
- ⑥ 【旗鉞】：【密教】祭壇を荘厳する【玉幡】を指すか(『伊藤彫物』 p.207)、
- ⑦ 【鈷】(【護摩箸】に【爪】)：【密教】祭壇(『伊藤彫物』 p.182)
- ⑧ 【金剛杵】(『伊藤彫物』 p.)、【鋏形】：(『伊藤彫物』 p.210)、組み合わせ(【天蓋】【梵字】【鋏形】【蓮台】)(『伊藤彫物』 p.216)
- ⑨ その他【七星】、【菊】等

4.14 記述変遷事例：【正宗】または《不動正宗》

ここで、《不動正宗》に関する記述変遷を見てみよう。

- ① 1316年起算の『銘尽』では、〔正宗〕の名が登場したばかりで流派のみある。
- ② 1595年の『光徳刀絵図』では《不動正宗》について「御物 乃ほ里龍 長サ 八寸」と記し、押形を描いている。
- ③ 1596年起算の『本朝古今銘尽』では《不動正宗》解説文はないが、〔正宗〕の簡略な特徴を記す。
- ④ 1653年奥書の『空中斎秘伝書』では《不動正宗》解説文はないが、〔正宗〕の詳細な特徴を記す。

例：「板目なり樋をかくに横手筋より一寸程下にてかきとむるなり刃の事鑑本の刃を三重にやく其少し上にひらき丁子つぼみをやく其上に扇刃をもやくなり其上にしま刃を鉞(にえ)にて焼くなり物打にふじ山と云ふ刃を焼くなり(後略)

と、かなり詳しく特徴を記している。

- ⑤ 1812年発行の〔水心子正秀〕『劍工秘傳志』²²書影☆)《不動正宗》解説文はない。問に答えてコマ50で、以下のように正宗を解説している。「問：正宗の如くはなやかにして潤はしく且刀味慥なるにあらず哉(中略) 答：正宗のごとき花やかなる焼刃を成さんとするときは如何にも火強に焼ざれば刃の模様鉞匂十分にあらはれず(中略)。問：鎌倉正宗、郷義弘、栗田口吉光を三作と号し(中略) 答：吉光は誠に上作なり(中略) 又適々模様を焼きたるは其鉞いかにもはぜやかにして、正宗義弘に替ることなし。(後略)」
- ⑥ 1846年発行の〔尾関永富〕撰『掌中古刀銘鑿』(略称：『雲智明集』²⁴書誌)：各特長を種別して解説している。正宗が掲載されているのは以下のとおり。

「煮アル物 上作のニエハ細ニシテ 光アリ相州上作大和物等 上々正宗 郷義弘 貞宗

(後略)、「玉焼アル物 (中略) 正宗 貞宗(後略)」、「石ケアル物 (前略) 相州物 (後略)」、「入札ノコタヘ：正宗十哲ハ互ニイヤ筋能候」(中略) 親子兄弟師弟ハ當同前(中略)、「位列 — 吉光 正宗 義弘 — 久国 国吉 国安 行平 貞宗 宗近 (後略)」、「二筋樋 信國 正宗 貞宗 (後略)」等。

- ⑦ 1905年発行の〔本阿弥弥三郎〕著『刀剣鑑定秘訣 古刀編』：正宗個別項目あり(コマ93)、以下の通り

「正宗：正宗は、正応、建武頃の鍛工にして、岡崎五郎入道と云ふ。行光の子にして新藤五國光の弟子なり。太刀姿幅廣く反少なく三棟にして真廣し。おろし深く、たまゝ庵棟のものもなきにあらず。切先の伸びたるも小切先のものもあり。鍛板目にしてさらりと麗しきものなり。地色は青くして紫に、且つきらあり。焼刃は亂刃、のたれ刃ありて、能く沸え、粗くして稻妻、砂流しあり。大出来には、丁子を見るがごとく(中略) 抑も正宗は劍工の巨ハクにして、これに匹敵するものなし(後略)」

- ⑧ 2009年〔佐野美術館〕編『短刀の美』p.56-57^{69書誌)}では、〔リコー〕と共同開発した【日本刀撮像装置】(関係論文：上条直裕等(2012)^{70書誌△)}による高精細画像と、〔田野邊道宏〕氏『名品刀絵圖聚成』^{71書誌)}の【押形】引用により詳細な画像が閲覧できる。解説文は以下の通り。

「平造、三つ棟、わずかに先内向き、刃長・身幅尋常、ふくら枯れる。地文は板目つみ、地沸つき、地景入る。刃文はのたれに耳形ごろの互の目、尖り互の目など交じり、匂ふかく、沸つき洲流し・金筋かかる。銚子は乱込み先尖りごろに返る。彫物は表の櫃中に不動明王、裏には護摩箸。茎は生ぶ、先劍形、鑢目浅い勝手下がり、目釘孔一、表孔下中央に行書体の二字銘。正宗は相模国新藤五國光の高弟(中略) 不動明王の彫物は、桃山時代に本阿弥光二(光悦の父)の好みにより、野間玄琢の祖父玄安(信長に仕え彫の名手)が彫ったと伝えられている。(後略)」

- ⑨ 2017年現在【国指定文化財等データベース】^{2全文)}

「名称：短刀〈銘正宗(名物不動正宗)ノ〉 | ふりがな：たんとうくめいまさむね(めいぶつどうまさむね) |

員数：一口 | 種別：工芸品 | 国：日本 | 時代：鎌倉 | 年代： | 西暦： | 作者：正宗 | 寸法・重量：身長：24.9 内反(cm) | 品質・形状：平造、三つ棟、内反り、鍛小板目、ところどころに黒く変りたる肌交じり地沸一面につく。刃文湾れに互の目交じり砂流しかかり沸よくつき、物打上特にはげしく金筋稻妻かかる。帽子乱込み掃きかけ沸荒くつき金筋かかり、裏尖って返る。棟焼あり。彫物表腰櫃の中ニ不動の浮き彫り、裏護摩箸。茎生ぶ、先劍形、鑢目筋違、目釘孔一 | ト書： | 画賛・奥書・銘文等：中央に大きく二字 | 伝来・その他参考となるべき事項： | 指定番号(登録番号)：01673 | 枝番：00 | 国宝・重文区分：重要文化財 | 重文指定年月日：1953.11.14(昭和28.11.14) | 国宝指定年月日： | 追加年月日： | 所在都道府県：愛知県 | 所在地：徳川美術館 愛知県名古屋市中区徳川町1017 | 保管施設の名称：徳川美術館 | 所有者名：公益財団法人徳川黎明会 | 管理団体・管理責任者名： | 解説文：相州正宗の作。正宗有銘確實のものは少なく、本短刀の銘は好資料である。享保名物帳に記載されている不動正宗が本短刀である。」

以上や各典拠を見ると、次の傾向が分かる。

- ① 『銘尽』の頃は【鑢目】と【茎尻】の形状に注意しているが詳細ではない。『銘尽』頃からの鑑定用語が現在でも使用されている。(例：刀の形状部位：【棟】【中心】【区】【劍樋】、焼刃(刃文)：【直刃】【乱れ焼刃】【足深く入る】【砂流し】等)。

- ② 承応二年（1653）〔本阿弥光甫〕の『空中斎秘伝書』から個別刀匠についての特徴が詳しくなる。
- ③ 〔水心子正秀〕は秘伝の造刀を公開し、その観点から批評している。
- ④ 『雲智明集』は様々な特徴を区分けし、あてはまる刀工を記載した鑑刀に便利な書。【流派】は『古刀銘尽大全』^{72書影□}の誤りを訂正する目的で作成した書故に、詳しい。
- ⑤ 『日本刀大鑑』、『雲智明集』は詳細な流派を記しており、『銘鑑』所収の『古今銘尽』を併せて流派確定のデジタル典拠となる。
- ⑥ 『短刀の美』や【国指定文化財等データベース】等、現在の鑑定用語の記述は格段に精緻になっていることが分かる。

5 終わりに：デジタルアーカイブ最新動向を見据えて

刀剣用語のシソーラスを作成するには、【流派】、【作品名】、【鑑定用語】の階層構造を明確にする必要がある。それらを分析し記述する場合、デジタル典拠が最も重要になってくる。『国会デジコレ』や『Google Books』、【東京大学史料編纂所データベース】^{73全文}等のオープンな【書影】や【全文】、あるいは、【e-国宝】や【文化遺産データベース】、【nihuINT 統合検索システム】^{74全文}など国宝・重要文化財等の作品画像や解説を探索するデータベースなどで、刀剣分野のシソーラス構築のためのデジタル典拠群が存在する。また、最新の国際画像共有フォーマット IIIF（解説：永崎研宣氏「[digitalnagasaki のブログ](#)」2016年4月28日）^{75全文}により公開したデータが国際的に共有できる。すなわち永崎氏によると「**IIIF Presentation API**」^{76全文}に沿った形式の【JSON (JavaScript Object Notation)】^{77全文}ファイルで画像ファイルの情報をサーバに置いておくとどこのどのビューワでも自由に表示できるし画像上に注釈を付けたりすることもできる」仕組みにより、複数国の複数オープンデータを一画面で比較したり、注釈したりできる。幸い、〔東京国立博物館〕も「[デジタルコンテンツ無償利用について](#)」^{78全文}でクリエイティブ・コモンズの「CC BY-NC（表示・非営利）」にあたるライセンスとなった^{79全文}。本稿も【学術機関リポジトリ】^{80全文}でオープンデータとなる。【ウィキペディア】は典拠の信頼性が最も重要視される。従って、本稿の「デジタル典拠」群を起点として【ウィキペディア】の刀剣関連用語を記述すると、ウィキペディアの多言語ウィキペディアンにより多国語版【日本刀】用語がいずれ構築され、世界の日本文化発信へ貢献できる。現時点では「日本の雑誌論文を探す」【CiNii Articles】^{81全文}に『刀剣美術』の書誌情報さえ掲載されていない。本稿校正中に〔奈良文化財研究所〕の【[全国遺跡報告総覧DB](#)】^{82全文}が【World Cat】と連携された。本稿が刀剣分野のデジタル典拠の起点として役立つことを願って本稿を終える。

注

- 1 筑波大学日本美術データベース作成委員会（1992-96）が作成した「日本美術シソーラス：絵画編」全文 URL: <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/jart/> がある。委員会は解散したが、筆写が工芸編を計画中
- 2 文化庁【国指定文化財等データベース】（文化財 DB）全文 URL: http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index_pc.asp
- 3 公益財団法人〔日本美術刀剣保存協会〕の機関誌『刀剣美術』 URL: <http://www.touken.or.jp/jigyuu/kikanshi.html>
- 4 国立文化財機構「e 国宝」全文: URL: <http://www.emuseum.jp/>
- 5 「国会デジコレ」正式名【国立国会図書館デジタルコレクション】全文: URL: <http://dl.ndl.go.jp/>

- 6 [Internet Archive] の【WayBach Machine】サービス全文 URL:<https://archive.org/web/>
- 7 [宮内庁] の【正倉院宝物検索】書影☆
URL:<http://shosoin.kunaicho.go.jp/ja-JP/Treasure?id=0000010568>
- 8 松雲堂編輯所編『新訳古事記：標註』[国会デジコレ、959085]、書影☆：
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/959085>
- 9 和田英松編『増鏡：校註』明治書院、1925、「国会デジコレ、943303」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/943303> コマ20 <http://dl.ndl.go.jp>
- 10 荒山慶一入力『増補本系増鏡・全二十巻』（【日本文学電子図書館】所収）
URL:<http://j-texts.com/sheet/msk.html>
- 11 本間順治校閲、石井昌国著『日本刀銘鑑』雄山閣、2003.7 所蔵館：http://157.1.42.1/ncid/BN_08622509
- 12 『銘尽』（『正和銘尽』）[国会デジコレ、1288371]書影☆URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1288371>
- 13 『長享銘尽』[国会デジコレ、2539344]書影☆URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539344>
- 14 『往昔抄』[国会デジコレ、2483063]書影☆URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2483063>
- 15 間宮光治「往昔抄についての一考察」（雑誌『刀剣と歴史』419）[国会デジコレ、7901113]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/7901113>
- 16 『光徳刀絵図集成』[国会デジコレ、1184136]書影☆URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1184136>
- 17 『本朝古今銘尽』慶長元年（1596）起算[国会デジコレ、9892696]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892696>
- 18 【嵯峨本】本阿弥光悦書、角倉了庵出版の豪華本。例：『伊勢物語聞書』3巻[国会デジコレ2606409]
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606409>
- 19 黒庵著『解紛記』慶長十二年（1607）[国会デジコレ、2553091]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2553091>
- 20 『刀剣古伝書』元和六年（1620）[国会デジコレ、2540978]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540978>
- 21 本阿弥光甫著『空中斎秘伝書』（鑑刀集成：諸家秘説所収）[国会デジコレ、951154コマ86-125]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/951154>
- 22 『水心子正秀全集』（1851）[国会デジコレ、2563725]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1020678>
- 23 『古今鍛冶備考見出』須原屋茂兵衛、天保六年（1835）増訂。「国会デジコレ書影☆」2536961
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536961>
- 24 『雲智明集』尾関永富撰、須原屋茂兵衛、弘化三年（1846）。所蔵：筑波大学
<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/mylimedio/search/search.do?mode=simp&keyword=%E9%9B%B2%E6%99%BA%E6%98%8E%E9%9B%86>
- 25 『日本刀研究：佐藤幸彦刀剣論文集』佐藤幸彦、2007。所蔵：http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA_82419942
- 26 土屋温直編著；中央刀剣会編『土屋押形』上編、「国会デジコレ、1183668」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1266631>
中編、「国会デジコレ、1266644」、下編 書影☆
URL:「国会デジコレ、」<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1266646>
- 27 鎌田魚妙撰『本朝鍛冶考』第18巻 嘉永四年（1851）[国会デジコレ、2563725]書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563725>
- 28 本阿弥弥三郎著『刀剣鑑定秘訣 古刀編』巻1、青木嵩山堂、1905[国会デジコレ、854200]書影□

- URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/854200>
- 29 『刀剣と歴史』(雑誌、「国会デジコレ、7901128」書影□ URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/7901128>)
- 30 俵国一著『鉄と鋼：製造法及性質』丸善、1917「国会デジコレ、1877144」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1877144>
- 31 本阿弥光山監修；本阿弥光貞著『光山押形』刀剣会本部編、1、「国会デジコレ、1183668」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1183668>
神津伯著『新刀鍛冶綱領』吉川弘文館、1921「国会デジコレ、1185467」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1185467>
- 33 本阿弥光遜、室津鯨太郎編『刀工総覧』国会デジコレ、977701」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/977701>
- 34 本阿弥光遜『刀剣鑑定講話』国会デジコレ、1017613」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1017613>
- 35 今村長賀編『今村押形』大阪刀剣会、1926、「国会デジコレ、1186820」
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1186820>
- 36 川口陟等著『刀剣銘字典』「国会デジコレ、1190903」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1190903>
- 37 栗原信充、伊勢貞丈編『刀剣図考、武器考証』Google Books 書影☆
URL:https://books.google.co.jp/books?id=DrpDV5MqjDYC&printsec=frontcover&vq=%E5%88%80%E5%89%A3%E5%9B%B3%E8%80%83%E3%80%80%E6%A0%97%E5%8E%9F&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q=%E5%88%80%E5%89%A3%E5%9B%B3%E8%80%83%E3%80%80%E6%A0%97%E5%8E%9F&f=false
- 38 藤代義雄著『新刀集：刃文と銘字』藤代商店、1933「国会デジコレ、1125196」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1125196>
- 39 小泉久雄著『日本刀の近代的研究』小泉久雄、1933【Google books】書影☆：
URL:https://books.google.co.jp/books?id=LMtH4mgC2bEC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false「国会デジコレ、1213253」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1213253>
- 40 清水澄撰『刀剣銘大集』第1輯美術倶楽部出版部1934「国会デジコレ、1150492」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1150492> 第12輯まで書影□あり。
- 41 加島勲、内田疎天著『新刀押象集』「国会デジコレ、1174337」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1174337>
- 42 内田疎天著『日本刀通観』岡本偉業館、1935「国会デジコレ、1225365」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1225365>
- 43 小泉久雄著『鑑刀随録』「国会デジコレ、1261724」書影□
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1261724>
- 44 藤代義雄著『日本刀工辞典、古刀篇』藤代義雄、1938「国会デジコレ、1116200」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1116200>
- 45 藤代義雄著『日本刀工辞典、新刀篇』藤代義雄、1938「国会デジコレ、1116191」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1116191>
- 46 本阿弥光遜著『日本刀大鑑』日本刀研究会、1942「国会デジコレ、1125193」書影☆
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1125193>

- 47 『銘刀押形：御物東博』〔国会デジコレ、8799600〕書影□
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8799600>
- 48 『刀剣史料』（雑誌、〔国会デジコレ、3567723〕南人社、書影□
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3567723>
- 49 本間順治著『日本古刀史』日本美術刀剣保存協会、1963〔国会デジコレ、2508636〕書影□
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2508636>
- 50 『刀華会講話』第1、2-3、4集、1964-65〔国会デジコレ、2475424〕書影□
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475424>
- 51 飯村嘉章著『新々刀大鑑』〔国会デジコレ、8799584〕書影□
URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8799584>
- 52 『新版日本刀講座』第1巻～第10巻 雄山閣、1966〔国会デジコレ、2475547〕書影□ URL:
1巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475547> 2巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475548>
3巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475549> 4巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2476644>
5巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475550> 6巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2526253>
7巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2526254> 8巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475551>
9巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2475548> 10巻: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2526255>
- 53 『能阿弥本銘尽』室町時代〔日本美術刀剣保存協会〕蔵:
URL: <http://www.touken.or.jp/museum/shiryo.html>
- 54 『元亀元年刀剣目利書』室町時代〔日本美術刀剣保存協会〕蔵:
URL: <http://www.touken.or.jp/museum/shiryo.html>
- 55 神田白籠子著『新刀銘鑑』享保六年（1721）CiNii 所蔵館 URL: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA50410518>
- 56 常石英明編『日本刀研究と鑑定』古刀編、金園社、1977 CiNii 所蔵館
URL: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN11822630>
- 57 常石英明編『日本刀研究と鑑定』新刀編、金園社、1980 CiNii 所蔵館
URL: <http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA51555436>
- 58 【當同然】同様作の意味。1846年の『雲智明集』には「入札之コタへ」に「正宗十哲ハ互ニ【イヤ】筋（中略）親子兄弟師弟は當同然、」のように記している。
- 59 《十握劍 | とつかのつるぎ》黒坂勝美編『訓読日本書紀. 上巻』岩波書店、1943、〔国会デジコレ1904260コマ18〕書影☆ URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904260> に以下のようにある。「火神軻遇突智（ひのかみかぐつち）の生るゝに至りて、其母伊弉冉尊（いざなみのみこと）焦かれて化去りましぬ。（中略）遂に帯かせる十握劍を抜き、軻遇突智を斬りて三段に為したまひつ、（後略）」
- 60 《天叢雲劍 | あめのむらくものつるぎ》黒坂勝美編『訓読日本書紀. 上巻』岩波書店、1943、〔国会デジコレ1904260コマ36〕書影☆ URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904260> に以下のようにある。「素戔鳴尊（中略）十握劍を抜きて、其蛇を寸に斬る。（中略）中に一劍あり、此れ所謂草薙劍なり、（草薙劍、此をばクサナギノツルギと云ふ、一書に曰く、本の名は天叢雲劍（中略）日本武皇子に至りて、名を改めて草薙劍と曰ふ）」コマ37に「是を草薙劍と号づく（中略）熱田の祝部が掌りまつる神是なり」
- 61 《蛇韓鋤劍 | おろちからさびのつるぎ》黒坂勝美編『訓読日本書紀. 上巻』岩波書店、1943、国会デジコレ1904260コマ38〕書影☆ URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904260> に以下のようにある。「一書に曰く、素戔鳴尊（中略）蛇の韓鋤の劍を以て頭を斬り（中略）別に一劍あり、名付けて草薙劍と為す」
- 62 〔天目一箇神 | あめのまひとつのかみ〕黒坂勝美編『訓読日本書紀. 上巻』岩波書店、1943、国会デジ

- コレ、1904260コマ56書影☆URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1904260> に以下のようにある。「高皇産靈尊、大物主神に勅すらく、(中略) 天目一箇神を作金者(かなだくみ)と為し、(後略)」
- 63 〔太刀佩部 | たちはきべ〕黒坂勝美編『訓読日本書紀、中巻〕岩波書店、1939国会デジコレ1159875コマ38) URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1159875> に以下のようにある。「五十瓊敷(いそたましき)皇子、茅渟の菟砥(ちぬのうと)河上に居まして、鍛(かぬち)、名は河上を喚して太刀一千口を作らしめたまふ。是の時楯部、倭文部、神弓削部、神矢作部、大穴磯部、泊檀部、玉作部、神刑部、日置部、太刀佩部、併せて十箇の品部をもて五十瓊敷皇子に賜ふ」
- 64 《句礼の真鋤 | くれのまさび》(黒坂勝美編『訓読日本書紀、下〕推古天皇廿年)岩波書店、1939国会デジコレ1159888コマ72) URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1159888> に以下のようにある。「廿年春正月(中略)蘇我の子等ハ、馬ナラバ日向ノ駒、太刀ナラバ句礼の真鋤(後略)」とあるように句礼(中国の呉国)が良し」と歌われた。
- 65 松平定信編『集古十種:兵器・刀剣、兵器刀剣一〕国会デジコレ1900377コマ44-45) URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1900377>
- 66 尾崎元春、佐藤寒山編「甲冑と刀剣」(『現色日本の美術.21〕小学館、1970所収 p.81) 所蔵 URL:http://ci.nii.ac.jp/ncid/BN_01952243
- 67 【古事類苑画像検索システム】国文学研究資料館と国際日本文化研究センターとの共同開発。
<http://ys.nichibun.ac.jp/kojiru/en/>
- 68 伊藤満著『刀剣に見られる梵字彫物の研究:刀工と修験道の関係』(大塚工藝社、1989) 所蔵館:
http://ci.nii.ac.jp/ncid/BA_43308351
- 69 佐野美術館編『短刀の美:鉄の煌き』(佐野美術館、2009) 所蔵館:
http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB_00678822
- 70 上条直裕、高井雅明、種子田祐介著「日本刀デジタルアーカイブシステムの開発」(『Ricoch technical report』(2013) 所蔵館:<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019958981>
- 71 田野邊道宏『名品刀絵圖聚成』大塚工藝社、1999 書誌:
http://iss.ndl.go.jp/books/R_100000002-I_000002796032-00
- 72 菅原弘邦著『古刀銘尽大全』巻1-3, 4-6, 7-9 寛政四年(1792)
URL:<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1139940>
- 73 【東京大学史料編纂所データベース検索】 URL:<http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/> 古記録フルテキストDB、古文書フルテキストDB等30を超える日本史関連データベース検索。また、「電子くずし字典DB+木簡画像データベース・木簡字典連想検索」など辞典類もある。
- 74 人間文化機構【**nihuINT 統合検索システム**】
URL:<http://kyoyusvr.rekihaku.ac.jp/GlobalFinder/cgi/Start.exe> 構成する「〔国立歴史民俗博物館〕、〔国文学研究資料館〕、〔国立国語研究所〕、〔国立国会図書館〕、〔国際日本文化研究センター〕、〔総合地球環境学研究所〕、〔国立民族学博物館〕、〔地域研究拠点〕、〔京都大学地域研究統合情報センター〕のデータベースを横断検索するシステム。
- 75 永崎研宣「**digitalnagasaki** のブログ:」
URL:<http://digitalnagasaki.hatenablog.com/entry/2016/04/28/192349>
- 76 Cyber Librarian 訳「**IIIF Image API2.1**」
URL:http://www.asahi-net.or.jp/~ax_2s-kmtm/ref/iiif/apiimage_2.1.html
- 77 【JSON】(JavaScript Object Notation) json.org 編「**JSON** の紹介」URL:<http://www.json.org/json-ja.html>
- 78 〔東京国立博物館〕URL:http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1841

- 79 [CC BY | クリエイティブ・コモンズ・ジャパン] URL:<https://creativecommons.jp/tag/cc-by/>
- 80 【学術機関リポジトリ】 URL:<https://www.nii.ac.jp/irp/list/>
- 81 [国立情報学研究所] 【**CiNii Articles**】 URL:<http://ci.nii.ac.jp/>
- 82 [奈良文化財研究所] 【全国遺跡報告総覧 DB】
URL:<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2017/02/worldcat.html#more>